ケニヤに使して（二）

――ケニヤの社会生活――

南　信子

見知らぬ土地を訪ねることはこの上なく楽しく未知の国の人々に出あうことは更に大きな喜びであります。しかし他国にすみ、しかもその国の為になさなければならないことが与えられているという立場にありました私のケニヤ滞在の一か年は、さまざまの楽しい経験とともに、絶えず一種の不安と緊張が伴うことを否むことができませんでした。それはアフリカ人をほんとうに知らないというところからおこってくるもののように思いました。

ケニヤの首相ケニヤッタ氏はその著書の中で、アフリカ人の間にすむということと、アフリカ人を知るということの間には大きな違いがあるのだといい、ヨーロッパ人が文明の座から未開をさぐる態度にするどい批判を加えておりますが、これはまさしく私に与えられている忠言であることを、しみじみと感じました。アフリカ人の本当のよき理解者でありたいということは、私の滞在一か年の切なる願いでありました。

しかし一国の歴史とその社会構造や生活の実態を知ることは容易なことではないとつくづく思うのであります。ケニヤは独立後急激に変化しつつありますので、私の見たケニヤはすでに過去のケニヤであるかもわかりませんが、知り得たところを書きしるしてみたいと思います。

一、ケニヤ独立後の問題

ケニヤの人口は約八七〇万でありますが、そのうち大体一％が

イギリス人を中心とするヨーロッパ人であり、三%はインド人を中心とするアジア人であるといわれております。

独立前まではアフリカ人はイギリス政府の支配のもとに、自活能力がなく労働能力が低いという理由で政治にも参与できず、社会の重要なポストは皆ヨーロッパ人によってしめられ、商業機構は完全にインド人によって牛耳られており、殆んどのアフリカ人は社会の下層部に低賃金の労働を余儀なくされておりました。社会人としてもヨーロッパ人並にみとめられず公園、レストラン、ホテルなどにはアフリカ人禁止の立札の立っている所も少なくなく、設備のよいイギリス人の為の学校にはアフリカ人は皆無であったといわれております。或る部族は農耕牧畜を職業とし、わずかに自分の家族を支えるという最低の生活に甘んじて今日に至ったようであります。しかしこうした生活の中で、心あるアフリカ人は、いつか立ち上る日を夢み、忍従の日々を過していたのでした。民族解放運動は早くも一九二〇年におこり、一九五二年には「我らの土地を返せ」というスローガンのもとにキクユ族を中心としてはげしい民族解放運動が展開されました。これはケニヤの最も肥沃な土地を殆んどしめるイギリス人への抗議であったばかりでなく、彼らの政治的なめざめであり、より高い社会生活を求める民衆の悲願が結集したものと考えられましょう。

しかしこの運動がいかに悲惨なものであったかは、その流された一〇万の犠牲の血や、その当時の指導者であった現首相ケニヤッタ氏の九年間にわたるイギリス政府による監禁の生活などからも想像することができます。ケニヤッタ氏は「生けるもの死せるもの、やがて生れいずるものの為に破壊された我らの神殿を再建する為に団結して働こう」と民衆を励まして今日に至ったのであります。時至り昨年一二月一二日に独立したケニヤにはもはや彼らの社会への進出をはばむ権力はなくなりました。

あらゆるビルにひるがえっていたイギリスのユニオンジャックの旗はおろされて、黒（アフリカ人の皮膚の色の象徴）と赤（自由・独立への情熱）緑（自然資源の豊富をあらわす色）を基調とした独特のケニヤの国旗が、澄みきった南国の空に強烈な印象を人々に与える太陽の光とともにひるがえるようになりました。土地は彼らの手にかえりつつあり、重要なポストにアフリカ人を起用する努力がなされつつあることは、アフリカ人にとって誠に喜ぶべきことであります。独立祭当日のアフリカ民衆の興奮が外国人である私の胸にもいつまでも消えないで残っているような心持ちがいたします。

しかし、独立をかちえ、自由を与えられた彼らには今、重大な責任がかけられていることを今更のように彼ら自ら経験しているようであります。彼らの間には教育を受けた指導者、技術者、専門家が少なく、独立後は今度はあらゆる方面で彼ら自身の無能

力、無知と戦わねばならない現実の問題に直面しております。この悩みもまた深刻であるといわざるをえません。

二、人間性の回復

しかも彼らはイギリス政府の下、その隷属の期間が長かっただけに、知らずして受けてきた傷手も大きく、被支配者の支配者に対する抵抗をもたぬ者ともてる者との対立は、黒人と白人という人種問題ともなり、複雑な人間関係にゆがめられた人間性のヒズミも大きいように思われます。彼らにはまず人間性の回復が必要であることを痛感いたしました。首相ケニヤッタ氏は民衆にむかって「過去を忘れよ」と訴えておりますが、私は過去を忘れるだけでなく、彼らが新しい人間観を確立して立ち上ることが絶対に必要であると、つくづく感じさせられました。人間は神の前に等しい存在価値をもっていることを真に理解し、民族による優劣感をすて、人間は人種や民族をこえ、お互いに人格を尊重しあい、愛しあって生き、世界の為に寄与すべきであることを自覚して立ち上ってほしいと願う気持でいっぱいであります。これはケニヤだけの問題でなく、私ども一人ひとりの共通の問題であり、世界の平和を願う者のすべての祈りでなければならないと思うのであります。

三、多人種国家、部族制度

またケニヤは、長い間ここに定着してすんでいるイギリス人とインド人と協力して、共に繁栄の道をはかるように運命づけられている国のように思われます。困難ではあるが多人種国家としての特徴を充分に発揮してほしいと願わざるをえません。またケニヤには約七〇の部族があるといわれます。国語をもたず、それぞれ異った言語、習慣、社会構造をもつ部族が政治的に統一されることは非常に困難であります。「一人死ぬなら皆で死のう」ということばが同じ部族の間で交されるほど、部族の団結心は強く、部族間では小部族は大部族の支配をおそれています。こうしてケニヤには外には多人種国家としての悩みがあり、内には部族制度の根づよい伝統からくる国内の問題が横たわっております。

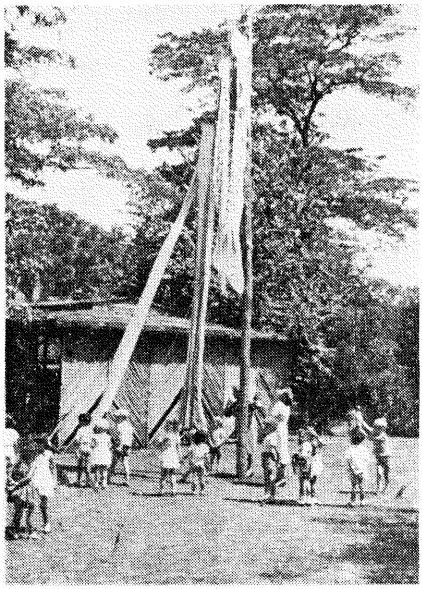
更にケニヤにはまだまだ古い社会構造、例えば成人の儀式、年令集団、長老制、一夫多妻制などを保存しようとする後進性もつよく根をはっているようであります。これらは産業文化の発展とともにやがて崩壊してゆくものと考えられますが、外側から強制的にこれを破壊しようとすることは困難であります。彼ら自らが教育を受けることによって、すてるべきものをすて、生かすべき伝統を保ってゆく方向にゆくことが望ましいと思うのであります。

四、コミュニティセンター

ケニヤ政府はケニヤ国を地域的に区分し、地域ごとにセンター

をおき、地域の発展に心を用いていることは前号にもふれましたが、ここでは学校にゆくことのできなかったおとなの為に英語やスワヒリ語を教えたり、家庭生活に必要な育児・栄養などの家事の知識や実習、家庭工芸などの技術の指導なども行なわれますが、これらに多くの婦人たちが参加しております。医療施設をかねそなえている所もあり、一般のアフリカ人によく利用されております。

地域における話しあいなども盛んで、絶えず集会をひらいて問題を討議したりいたします。私どもが幼児教育施設にもっと子どもの遊具が必要であることを、或るセンターで開かれた集会で訴えたところ、その村の老人、若者がすぐに集ってきて私どもの指導により材料を持ちよってジャングルジムやクライミングロープ、ぶらんこなどをつくる為に努力したのには驚かされました。ナースリースクールの為にも地域の婦人達が努力して働いていることを知り、世界の至るところに、子どもの幸福の為に奉仕する婦人があることを思い力をあわせ、思いを一つにしてこの尊い仕事を励まなければならないことを痛感するとともに、ケニヤ政府が更にこの地域の発展に心を用いることを願ってやまない気持でいっぱいであります。



日本から送ったこいのぼりを喜ぶ子ども
（子どもの日が無いので、一年中空にひるがえっている）

モンバサの講座に集った先生たち

五、ケニヤの悩みと将来の希望

さまざまの悩みをもつ国ケニヤ、この国の悩みを解決する鍵はどこにあるのでしょうか……

私は気候もよく、自然資源に恵まれたこの国に大きな期待をかけたいと思います。特にこの国に教育が振興され、彼らの間に広まっているキリスト教の信仰が徹底することに大きな希望をもつものであります。教育を受けることによって真に彼らの人間性が回復され、正しい人間観・世界観をもった人々が政治を司どり、民衆を指導するところに、ケニヤの将来には明るい黎明(レイ)が訪れることを信じます。

いずれの方面にも欠けている専門家、技術者、指導者が教育によって養成されることが必要でありますし、民衆全体が高められる為にあらゆる機会を用いなければならないと思います。その為には小学校、中学校の教育が義務化されることも必要でありましょう。高等学校や大学がもっと増設されなければならないと思います。しかし私は教育は幼児期から、そして人間は一生涯を教育されなければならないことを今更のように痛感いたしました。

これはケニヤだけの問題でなく、世界共通の人間の問題であると思うのです。しかも真に人間を向上させ、世界の一人ひとりを幸福にする教育でなければならないと思うのであります。人間の姿を見失わせ、世界を戦争に導くような文明を創る教育ならば、それはやがて人類を滅亡に招くものであると思います。ケニヤの人々は今、教育を受けることに無限の価値を見出しております。アフリカ人にとっては教育を受けることは生活の苦しさから逃れる唯一の道であると信じられているようであります。教育は個人と家族の幸福な生活に直結していると考えられておりますが、教育を受けていなかった為にヨーロッパ人から軽蔑され、長い間その圧制のもとに生活の苦しみをなめてきた人々にとっては、それはやむを得ないことでありましょう。が、もっと広い、また真実な意味で彼らには特に教育が必要であることを自覚してほしいと思うのであります。

まだまだ個人の立身出世の為によい成績を争い、有名校入学の為に勉強するその目的は、ただ将来のよい社会的地位につらなっているといったような教育が、人々の魅力のすべてであるように考え、また考えさせているような教育が行われていることをみとめないではおられません。

正しい人間観・世界観を育て、人類に幸福をもたらし、世界を平和に導く指導者を養成する教育、地上に生れた者が一人ものこらずその能力に応じて社会に責任をもち、奉仕することのさいわいを知ることの出来る、人間の育成をめざす教育であってほしいと願わざるをえません。

（北陸学院短期大学）